

2012（平成24）年度 京都大学 入試問題 文系 第1問 解答例

* 「私小説」の一部であると、出題者がわざわざリードで告知していることに注意。単なる小説の読解にとどまらない、随想読解法を併用しよう。

問一

父親と海へ行くことを幸せそうに空想する二女の笑顔に、父親に寄せる夢と希望を感じ取ったことで、病身の緒方は、幼い娘を残しては死ねないという束縛を感じ入ったから。

* 「ああこれは」（詠嘆）自体と、その指示内容である「幼女の笑顔を見て、そこに（病む）父親への夢と希望がかけられている（のを悟ると）」を踏まえた答案であること。

問二

衰退した晩年の緒方が、自己の生死の理由や、そこから次々生じる種々雑多な疑問に納得できる答えを得ようと焦り、家族の者にも知らせず、自分一人で思考に耽る私的な内面。

* 小説問題の解答の基本中の基本として、「あせる」「納得したい」などの心情表現を極力活用すること。

* 傍線部の「誰にもものぞかせない」「小さな」「部屋（のようなもの）」をそれぞれ置換・説明できているか。

問三

従来 of 緒方には、人間の全努力の巨大な集積の目的とも思われる生死に関する問題は、一応知的に理解するだけで実感のない他人事であり、当然のことと看過してきた。だが、病んで余命の短さが事実となった今、はじめて自身の問題として痛感され、答を得たい新鮮な問題となったという事態。

* 傍線部（3）の時点を取り違えないこと。「判り切ったことが判り切ったことでなくなった」という事態の後に、「改めて見直すと」「新鮮であった」のであるから、傍線部時点における「事態」そのものの内容には、「見直す」「新鮮」などは含めてはならない。

問四（文系のみ） * 解答行数を現在の傾向に合わせて四行とした。

毎日家族と普通に接しながら、閑さえあれば彼らと無関係に、秘かに内心で生死に関する問題を考えようとする緒方の状態は、出家遁世ぐらいは自宅にいても可能であるという自分の文言に、何かしら該当するとも思われるから。

* 「家の中にいて、出家遁世をする」という私信の文言が、「緒方の状態」に当てはまるようだと思われる。その理由は、「在家のままの世捨て・仏道修行」が、「家にいて家人と無縁の思考を一人行う」とことと類するからである。

問五

父親や男としては家族からの期待に応じて生きようとし、他方、作家としては作品の執筆に対する野心や欲求を保ち、やがて死が訪れるときまで立派に堂々と堪え忍び、平静に持ちこたえて生き抜こうとする、病身の緒方の気負い。

* 「雄鶏」であるのは、「オス」＝「男・父」であるからであり、その「精神」とは「気負い」である。「父親・男として」「作家として（私小説であるというリード文に注意）」「静かに持ちこたえて」いこうとする「緒方の・気負い（＝俺の・雄鶏精神）」。

* 京大現代文の場合、随想からの出題が圧倒的に多いことから、そもそも「全体要旨」や、「そのように言える」論拠が問われることは少ない。「論」が完成していない段階での「想いに随う」文章だから当然であり、また、理由説明では「筆者がそのように言うのはなぜか。」と、「筆者（S）が言う（P）」際の主観的理由が問われるのも、そのゆえである。まして、今回のように小説で「論旨」などナンセンスであるから、「本文全体を踏まえて」と問われているのは、全体の要旨などを問うものではなく、「このあたり以外にも解答要素はありますよ」というヒントを出題者が与えてくれているのである。